

廣津柳浪先生選



綾 蕭 小 説

○朝 日 和

岩代須賀 川本町 服部水仙子

「如何したの？」飛白の福々とした筒袖にヤダの多
い海老茶色の前掛をかけた三つか四つの男の子が、瓦
斯燈に海津とある家の黒塀のところに行んでしくく
泣いて居たのを、母の墓参の歸途、つと寄り添つてこ
ふ問ふて見た。

「え如何したのよ」と覗き込んだ自分の顔を、涙が一
ばいに浮んで居る大きな目で見上げて、暫く黙つて居た
が「草履が切れたの……」と幽にいつてまた不思議
そうに自分の顔を瞞めて居る。紐足袋の小な足に穿ち
て居る赤い緒の麻裏の鼻緒が切れて居るので、袂を探
りて半巾を裂いてそれをよりながら聞いて見た。
「何と云ふ名なの？」「秀ちやん」「そう、幾つ……」

「三つちゆ、手早く鼻緒をすげ終へた時、四辻に廣吉
をして居た活動寫眞の樂隊が、節面白く箱根の山を奏
しながら表通りを曲つて往つた。秀ちやんは其を残
惜しそうに後見送つて居たが旗の先が漸く見えなくな
ると急にまた歡歌りあげた。大方今の樂隊に着いて來
て、つひ此様な遠くまで、そして草履の緒が切れて困
つて居たのであらう。

「姉ちやんが送つて往つてあげますからね、お家はど
こ」あつち」と町はずれの方を指す紅葉のやうな手を
取つて自分は今來た道を戻つてゆく。
松並木を通り抜けると田圃道、刈り取られた稻の跡に
獨り淋しく残つて居る案山子の笠に、今朝の霜がとけ
かゝつて餘程昇つた旭にキラ／＼と光つて居る。疎ら
な家々の軒や背戸に、赤く實つて居る柿の枝もたはし
に、青く澄んだ空には一點の曇りもないが、ゆるく輪
を描いて居る鷺一羽、實に近頃稀な朝日和である。
廣からぬ道を幾曲り餘程來たと思ふ頃俄に我手を逃れ
て馳せ出した。杉垣の間に白壁の二つ並んで見える廣
い屋敷の其杉垣に寄つて惘然と向ふの田の面を眺めて
居るうら若き姉様かぶりの人の我目に入つた時。
「オ、秀ちやん！」とばかり驅けて來て確と抱きあげ

た。能く歸つてお呉れだ！秀ちやん、母ちやんもお祖
ちやんもどんなに心配したかおられないよ、一鉢どこま
てお出でだつたの、

お祖母ちやんはね
……お祖母ちやんは
ね、私が祖母だから
秀ちやんを苛めたの
だらうつて……」

云ふうちにほろ／＼
と涙がこぼれた。
「秀ちやんもうどこ
へもお出でよはない
よ！」

「母ちやん姉ちやん
が……あのこの姉
ちやんが……」
と抱かれた身をひね
つて自分を指せば、

「オヤ！」と抱いた子
を下して襷をはづそらとした時、塵敷の縁にさびた老
婆の聲「秀坊歸つたかい、早くお祖母ちやんとこへお



清

出で」子はまたをなたに驅けて往つた。やがて「オ、
母ちやんがどうかおしだつたんだらう……」と聞

えよがしの高聲。
「貴女が送つて來て
下すつたのですか、
あ、有難うございま
した！」がつくりと
九留が類れてハラハ
ラと地に散つた露幾
竿、納屋の前の鶏が
時をつくつた。
自分は云ひ知らぬ感
にうたれて道々を
考へて進つたのであ
つた。祖母！世の多
くの祖母は残酷であ
る。祖母は残酷なる
ものと信じて居た。
然し眞のあたり見た
今この現場は如何だらう、奇酷なる繼母の行爲は猶疑の
眼にのみ映ずるのではあるまいか？こたび自分にも新

らしき母が出来るべくなつたのであるがそれに對してあまり清い心を抱いて居なかつた自分は、さかぬ氣の祖母其性に似た妹の間にあつて、繼母の同情者となり、慰藉者となつて、曇れる眼鏡を拭ふべく決心したのである。それにしてもあゝ、我母たるべき人はそも如何な人なのであらうか？

繼母だからとて人格の如何に依つては、必ずしも殘酷なもの計りてもあるまい、多くの作が繼母を悪いものにして奮くのに反對して、善く書いたと云ふ事も此篇の作者が眼さきの利いた處であらうけれど、それよりも文壇の活躍して居る事が、如何に多く此作者を重くならしめてあらう(選者評)

夕日の光

安藝 玉 椿

今年も早や十一月の半となつて、吹きすさむ木枯も物淋しい、殊にこゝは田舎の一小村、四五十戸の農家の中に少し目立つた門がまへの家がある、今しも其の六疊の座敷に、五十路に餘る病み上りの父が、寢床の上に起き直つて、傍には四十格恰の、さまで美しくはないが、どこことなく昔を偲ばせる氣高い母と、其れによく似た十五位のやさしげな娘とが座つて居る、父は二

居た。

實に澄江は今年の春、優等て小學校を卒業し、なほ續いて女學校へ進むべく父に願つたのも二度三度ではなかつたが而し頑固一徹の父はこれを許さなかつた、ところが夏以來、ふとした事から一時は生死も覚束ないまでひどく煩つた父は、澄江が一通りならぬ心盡くしに、いたく感じたものと見えて、今斯くいつたのである、あゝ、これを聞いて彼れはどんなに喜んだらう、また彼の母はどんなに満足したであらう。秋の日脚の短くて、早や時にかへる小鳥の聲が聞える、折から夕日の光いと美しく、此の座敷の障子にうつた。

「汝が表はず人物は即ち汝自身の人物を表はすものである」とやら、澄江は作者が理想の化身であらう。此篇の技巧、乃ち筆のなれないのには言ふまでもないが、着想の高潔なると、眞摯なる描寫とは讀者にも多大の感動を興へてあらう、夕日の光もわざとらしくなく、此際最もふさはしい後景であつた(選者評)

ふた道

和泉 白ばら女史

肌吹く朝風身を切るがやう、黄金色した稻の穂も、こ

人に向つて「實にお前達には一通りならぬ心配をかけた……喉骨が折れたらう、すると母が「いそそんな事は少しも……それにしてもあれほどの御病氣がこんなにならうと早くおなほりにならうとは思ひませうよ、ネエ」と嬉しうに娘を見返つた、娘は「ほんとに萬一の事でもあつたらと大變心配いたしました、この頃のやうに一日増しにお顔色がよくなつては……」とこれも嬉しうに堪へぬ風情、父はまた口を開き、「常々出入りする人達も、こんな病氣になつてからは、誰一人顔出しもしない、それに下女までが暇を取つて行くといふ有様で、毎日一里餘の道を薬取りに行つて、歸つてからは妹の世話やら臺處仕事、お母さんは看病につきつきりだから、何から何までなれぬ事を手一つで……澄江、無事かつたらう、あゝ己は今まで考へ違へて居た、學校へなど出すと只なまぬきにはかりなつて家の事などは少しも出来ぬものと心得て居たが、決して決してさうでない事を己は悟つた、何もかも其の心の掛け一つだ、澄江！來春は必ず女學校へ入れてやる、立派に仕上げて女らしい女となつて歸つて來な」氣強く言ひ放つたが、さすがに老の目には露がきらめいて

この數日の中に残り無く刈り取られて、野良一面のまる裸體、時々百舌の囀りがあちらこちらに聞えて居る。あゝ嫌な——いつそすつぱり學校を廢めやうかしら……でもそうすればおつ母さんがお困りになるだろうし、外によい目的もないのだから……あゝどうすればいいのだろう……われ知らず長い吐息をついた。自分は毎日、この田圃道の朝露を別けて、二十四五町下手の秋山小學校に通ふて居る一教員である。初めて茲に教鞭を取つてから最早二年、いつも面自ラ日を送つて居たが、先々月轉任して來られた今度の校長日が増すに従ふて、ますます親切にして下さる、それが又自分にとつて云ひ知らぬ苦痛を感じしめるのである。

ついで此間の事であつたが、體操の時間に私と高山さんと二人で、生徒を校外へ出したのがはしなく校長のお氣に障つて、永い……叱責を被つてから、高山さんはすぐの轉任、遠い但馬の國へ越しになつた。あゝ思へば思へない、何故高山さんを出したのであるう、あんな事ぐらひで直ぐ出してしまふとは……いづつものあの方ばかりに酷く當つて、何故同じ受持の私を咎めなかつたのであらう、實に變てならない、高山さん